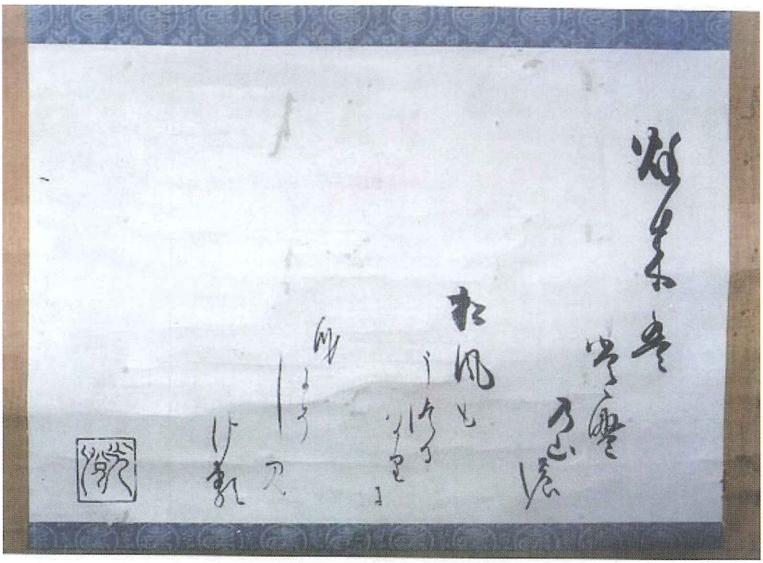
本阿弥光悦筆和歌巻・同断簡



［指定年月日］平成四年一一月一一日
［種別］有形文化財（書跡）
［名称］本阿弥光悦筆和歌巻・同断簡
［点数］二点
［所有者等］妙法寺
［所在地等］堀ノ内三―四八―八

有形文化財（書跡）

本阿弥光悦筆和歌巻・同断簡

本阿弥光悦（一五五八～一六三七）は、桃山・江戸前期の芸術家で書・陶・漆芸に秀で書においては近衛信尹・松花堂昭乗とともに「寛永の三筆」と謳われた。

本巻子は、全体が縦三三・六cm、横八八五cm、本紙が縦三三・六cm、横八四八・四cmの大きさで、見返しを金泥地とし本紙は胡粉を塗った卵殻色の具引き白地十紙を繋いでいる。紙背の第二紙と第三紙以下一紙おきの合縫には料紙を調えた「紙師宗二」の雲母印を置いている。書は『新古今和歌集』の巻第四秋歌上の「荻の葉に　ふけばあらしの　秋なるを　まちけるよハの　棹鹿の聲」から「ひぐらしの　鳴夕暮ぞ　かりける　いつも尽せぬ　おもいなれ共」まで連続一四首を散らし書きしている。

掛幅は全体が縦一〇三cm、横五六cm、本紙が縦三一・九cm、横四八・二cmで、巻子本と同様に具引き白地に巻子本の続きの「秋来ば　常盤の山の　松風も　うつるバかりに　身にぞしみける」を認めており、左端に「光悦」の黒文方印を捺している。書体が一致することや巻子本の最終第十紙の長さが前九紙に比べて短いことなどから両者は元一巻であったものが改装されたものと思われる。

本和歌巻に見られる空間を大きく支配する散らし書きの妙味は光悦ならではのもので、豊麗な書風は光悦の書風が完成する慶長期の特徴をよく示している。

【文化財所在地】